

巻頭言 「軽やかな旋回」

宇野 元

年上の幼友達がバレエを習っていて、母親同士が仲良しだったため、よく発表会に連れていかれました。小学生の上級になるころから、それが嫌でいやで、行かなくなりました。あれから幾星霜。チャイコフスキーのバレエ音楽などに耳をすますと、夢幻的な祝祭的な気分誘われます。そして、バレエの魅力を思います。飛ぶこと。軽やかに。重力の法則にさからって。空中を自由に舞いたいという人間の憧れ。バレエはそれを、厳しい条件付きながら実現してみせてくれる。限界への気高い挑戦として感銘を与えてくれる……

小説『ギレアド』のエイムズ牧師は、自分が飛びたつときについて、思いめぐらしています。

「この死の体から、誰が私を解放してくれるのか？」もちろん、その答えを知っている。「われわれはみな眠るのではない。変えられる。一瞬のうちに。瞳の瞬きのあいだに。」ぼくはこんな想像をする。うっとりするつま先旋回、あるいは、鋭い打球に若い野手が軽やかに飛びつく、ちょっとそんなふうじゃないかな。パウロの言葉はそれとかけ離れたことを言っているわけではないだろう。ともかく、あとの楽しみが示されている。

つま先旋回。原文は *pirouette* ピルエット。バレエダンサーが片足で回転する技法を表わす言葉です。エイムズ牧師（そして著者）がバレエを連想していると思うとうれしくなります。重力にくわえて、どんなに丈夫な人も年齢には逆らえません。飛ぶことは不可能に思えます。ところが。

ある主日の礼拝後、いつも静かに説教を聴いていた男性が近づいてきて、ながく病気を抱えていると打ち明けながら、尋ねられました。テサロニケの信徒への第一の手紙 4, 17 を示して、「空中で主とお会いするとありますが、それは本当のことですか？」私は、本当のことです、と答えました。すると、その顔にとっても穏やかなものが浮かんで、お礼を述べられ、去ってゆかれました。質問のさいの真剣さとともに、私の忘れない記憶になっています。体に痛みを持つなかで、御言葉の味わいが増していたでしょう。主キリストの再臨の恵みの豊かさをおぼえます。そのとき、私たちは文字通り、すべての重荷から解き放たれます。